

原爆被害者と農村女性をつなぐ〈表現〉と〈運動〉

——山代巴と手記集『原爆に生きて』をめぐる——

キアラ・コマストリ

はじめに

本稿が主な分析対象とするのは、原爆被害者の手記編纂委員会編『原爆に生きて——原爆被害者の手記』（三一書房、一九五三年六月）^①と、この手記集の編纂を含む初期の被爆者運動のなかで重要や役割を果たした女性作家山代巴（一九二二～二〇〇四）である^②。

峠三吉とその若い仲間たちを担い手とする被爆地広島文化運動がサークル詩誌『われらの詩』（全二〇号、一九四九～五三年）の発行をはじめ特徴的な成果をあげたことはすでに広く知られているが、そのうちには、原爆の詩編纂委員会編『詩集 原子雲の下より』（青木文庫、一九五二年九月）や前述した『原爆に生きて』の編集刊行、それと並行しての「原爆被害者の会」結成も含まれる。そして、『原子雲の下より』や『原爆に生きて』が編集刊行され、それと並行して「原爆被害者の会」が組織化される際に、

病弱な峠三吉に代わって年長のリーダーとしての役割を果たしたのは、山代巴であった。

のちに『荷車の歌』（筑摩書房、一九五六年。のち映画化・舞台化）

の著者として広く知られるようになる女性作家山代巴は、敗戦直後から広島県備後地方の農村を主な拠点として、農村女性のエンパワーメントを目的とした文化運動を展開していた。備後農村が山代巴の活動の拠点であったことは間違いないが、しかし、峠三吉が病に倒れたことにより請われて加わることになった一九五二年から五三年にかけての被爆地広島での運動経験が、彼女の文化的実践において決定的な意味をもったこともまた事実である。後述するように、山代巴は、備後農村と被爆地広島を行き来し、農村女性を対象とする運動と被爆者を対象とする運動とを連環させるなかで、〈表現〉と〈運動〉の新たな可能性を切り開いていったからである。本稿では、そのような見通しのもと、手記集『原爆に生きて』と山代巴との関わりを具体的に明らかにしたうえで、〈表現〉と〈運動〉という観点から、とりわけ女性の手記に注目

しつつ、原爆被害者と農村女性の間を往還した山代巴の独自の達成を明らかにする。

1 『原爆に生きて』成立の経緯と特徴

手記集『原爆に生きて』について、山代巴は、「戦後をはじめて広島へ出て、あの瓦礫の中の石壁に焼きついていた人影を眺めつつ考えたことから始まった、被爆者との交流がもとで実ったもの」⁶⁾だと述べている。敗戦後、山代巴をはじめて広島で原爆被害の実相を目の当たりにしたのは、一九四五年一月、GHQに呼び出されて広島を訪れた時であった。出頭日の前日に広島に着いた山代巴は、駅前で焚火を囲んで孤児や復員者と一夜を過ごした。このように、山代巴をはじめて被爆者と接触したのは一九四五年一月のことであったが、のちに被爆者支援や手記編纂の運動に関わっていくきっかけとなったのは、大村英幸・峠三吉ら広島青年文化連盟に集った人々との出会いであった。

広島青年文化連盟とは、当時広島文理科大学の学生だった大村英幸を中心に組織された文化運動団体であり、多岐にわたる運動を展開したこの団体の活動目的のうちには、被爆体験を記録に残すことも含まれていた。同連盟自体がこの方面で具体的な成果をあげることはなかったが、早い時期から大村英幸らが被爆者にその体験を書かせようとする素地を作っていなければ、次に挙げる諸著作が今見られるようなかたちで成立することはなかったかもしれない。

敗戦後の占領下、プレスコードによる言論統制があるにもかかわらず、

わらず、比較的早い時期から原爆被害の実相を著作にして発表したのは、峠三吉『原爆詩集』（一九五一年）や長田新編『原爆の子』（同年）である。その後、峠三吉を中心とする新日本文学会広島支部われらの詩の会は、被爆体験を持つ子供の詩を中心に前述の『詩集 原子雲の下より』（一九五二年）を編集刊行し、さらには被爆者を組織化しつつ大人の被爆体験を手記集として世に出すことを課題とするようになるが、この時期、リーダーの峠三吉は病身で、彼の周囲には学生しかいないなか、もう一人リーダーシップを取れるベテランを呼び寄せる必要が生じ、当時新日本文学会の尾道支部にいた山代巴がしばらく広島に滞在することになった。

広島に移った山代巴は、川手健をはじめとする年少の仲間たちとともに、まずは『詩集 原子雲の下より』を編集刊行し、次には、被爆者を組織化しつつ大人の被爆体験を手記集として世に出す作業に取り組みすることになった。このような動きのなか結成されたのが、「原爆被害者の会」（一九五二年八月一〇日結成）であるが⁷⁾、山代巴らは、被爆者に入会を進めるとともに、手記を書くなどで募集を行うのが一般的なやり方であったが、新聞などで募集した場合、結局集まってくるのは、ある程度恵まれており、また意識が高く、文章が書ける人たちの原稿が多かった⁸⁾。山代巴は、『詩集 原子雲の下より』の原稿を集めていく過程で、「この広島には、詩は作れないが、原爆の体験を手記にしたいという人々が沢山埋もれている」⁹⁾ことに気づいていた。そして、新聞を読む機会がなく、人目を避けているような人々のところへ直接訪ね

て行かなければ、もつとも苦しんでいる人たちの訴えは引き出せない」と、山代巴は考えていた。

しかし、もつとも苦しんでいる人たちのなかへ入っていくことは、容易ではなかった。『原爆に生きて』に「母子抄」を載せた吉川みち子は、山代巴が最初に訪ねた時には、「どこで聞いてきたか？」と、二度と来ないように泣いて頼んだという⁵⁾。それは、被爆者が「お見舞いに来た人の「まだ生きているの」という気配や、親切そうな言葉の裏にある冷たさを」⁶⁾感じていたからである。しかし、数年前から農村で、女性たちが安心して本音を語れる環境づくりに取り組んでいた山代巴は、被爆者たちの言いたくても言えない沈黙を見極める力を持っていた。したがって彼女の被爆者に対する最初のアプローチは、無理矢理に言葉を引き出すのではなく、「あるときは……海産物を売る行商人として、あるときは市の失業対策の朝の仕事の振当を待つ行列の中に入るなどして、未知の被爆者に近づき、そこからのまた聞きで、また未知の被爆者を知り、聞き書きをし、かなり親しくなつてから、原爆被爆者の組織化に情熱を燃やしている川手健を紹介する」⁷⁾というかたちをとった。最初はいくらで買えるか、こんなものはないかというような話から、次第に距離が縮まり、被爆までの暮らしや被爆後の状況を聞き出すことまでできた。農民組合や婦人会などで、女性たちが語り合えるようになるための活動に長く力を入れていた彼女だからこそ、比較的短い期間で被爆者の沈黙を破ることもできたといえる。その結果、二七編の手記が集められ、一九五三年の六月には『原爆に生きて』が出版された。

上述したように、『原爆に生きて』においては、「新聞やラジオ

による募集には、あまり頼らず、我々が被害者の家を直接訪問し
てお願いし、書けない人々のは代筆してもいい、発表の機会に恵
まれない人々の、手記を書かれることに重点をおこう」(二一六
頁)という、当時としては先駆的な方針がとられた。また、代筆
してもいいが、本人の意向に沿わないことはいっさい書かない、
ということも重視された。のちにあらためて述べるように、この
ことは極めて重要である。山代巴らは、「手記に協力する場合、
自分達の主観をまじえないと言うことを原則とし……必らず本人
の意志に従つて書き、本人の意志どおり纏め」(二二二頁)たと
述べている。実際この手記集では、諸事情に配慮して匿名を用い
るということも普通に行われている。このように、「発表の機会
に恵まれない人々」に直接アプローチしてその手記を世に出すこ
と、言葉を持たない人々のところに出かけていき、その声を社会
に届けることが、最優先されたのであった。

しかし、本人の意向を尊重しようとする、被爆者の訴えをそ
のまま文章にすることはできず、手記は「環境の制約や、いろい
ろの遠慮から、私どもが直接うったえられた言葉のように、赤裸
な言葉で書くことが出来なかつた弱さを持つて」(二二二頁)い
るという問題が生じ、山代らは、直接会つて訴えかけられたとき
の強さが、本人の意向に沿つて手記を編集するうちに失われてし
まう、という矛盾に直面したのである。山代巴の若い友人であり、
原爆被害者の手記編集委員会の最も重要な担い手であった川手健
は、手記集刊行の直後に発表した「原爆文学についての雑感」で、
被爆者自身が訴えた激しい言葉をそのまま書くと、「その部分は一
引用者注」発表したくないというのである。……こうなると手記

も悲劇の全貌を明らかにすることが出来ない。……被爆者の苦悩は我々の想像する以上に深刻なものだが、それがその通り表現されて来ないのは何故か⁽¹⁰⁾と当時の読者に問いかけている。山代巴も、一九五五年に『文学』に発表した「広島県の文化文学運動」で、手記の「弱さ」の問題をめぐって、「この弱いということの中には、この県の文化文学運動者が学ばねばならぬ一番大きな問題がある」⁽¹¹⁾と指摘している。

この「弱さ」をめぐって、山代巴らは、「なれてしまえば何もなく住めるこの社会の病こそは、原爆患者の口に、目に見えぬくつわをはめていると気づいた時、たとえ弱くとも、せい一杯の力で、患者の言葉を同胞に訴えようと思つて、我々は敢えて弱いままの手記を集録した」(一二四頁)と、『原爆に生きて』の序文において述べている。山代巴らは、たとえ弱くても、被爆者自身の言葉によって、彼らの口にはめられた「目に見えぬくつわ」をはずそうとし、彼らに表現できる場を与えようとした。世の中に向けて発することのできない言葉のうちにこそその人々の一番訴えたい問題があることをわかつたうえで、彼らから彼ら自身の真実の言葉を引き出していくこそが、自らの担っている文学運動の果たしていくべき役割であると考えたのである。

2 『原爆に生きて』における表現と運動と女性

『原爆に生きて』は、被爆者を直接訪問し、信頼関係を築きながら、言葉を持たない被爆者たちから言葉を引き出していく、という〈表現〉の方法をとっており、またそれによって被爆者の組

織化を進めていく、という〈運動〉にもつながっていた。このような『原爆に生きて』をめぐって、小田切秀雄は同書が刊行されてから二年後という早い時期に同書は「文学運動の一つ」であったと評価しており⁽¹²⁾、七〇年代には、長岡弘芳が、当時は「ノンフィクション分野の新しい成果として注目」されたと指摘し、「集団記録方式が有効に社会に機能しうる実例を提示してみせた」⁽¹³⁾と評価している。また、「原爆被害者の会」の川手健は、被爆者の手記の編纂という〈運動〉を、原爆文学の〈表現〉の問題としても受け止め、前述した「原爆文学についての雑感」では、「単に文学の題材をとるといふ態度から、被害者の要求のために運動する……といつた積極的な態度に出なければならぬと思う」、「文学が被害者を前進させ更に多くの真実の声をあげさせる。そういうつたものにならなければ原爆文学の価値は半減すると思う」⁽¹⁴⁾と述べている。『原爆に生きて』の目的は、たんに被爆者の体験を「文学の題材」にするだけではなく、その体験を書かせることによって被爆者に自分を見つめなおさせ、また手記の発表を通じて被爆者同士の連帯を築くことにあつた。川手健のいう「被害者を前進させ更に多くの真実の声をあげさせる」「文学」とは、このような、〈表現〉と〈運動〉が一体となった文学であつた。

このように、『原爆に生きて』という〈表現〉は、被爆者の組織化という〈運動〉を生み出したが、それと同時に、手記を執筆した被爆者一人ひとりからも、それぞれの小さな〈運動〉が生まれてくることになつた。たとえば、手記「すみれのように」の執筆者牧かよ子は「広島県学徒犠牲者の会」を発足させてその中心的な活動家になつたし、手記「傷害年金受給のこと」の執筆者温

品道義は、自宅に原爆被害者相談連絡所を設け、被爆者の助け合いを生き甲斐としていった。また、「子供らとともに」を執筆した尾形静子は、『地方』という生活記録グループに参加し、「母となりて」の池田清子は、母親大会に被爆者の代表として出席し、「夫はかえらない」の多田マキ子は、原爆訴訟の原告団の一人になっている。

すでに述べてきたことから了解されるであろうが、『原爆に生きて』の執筆者には、女性が比較的多かった。このことは非常に重要である。二七編の男女比を見てみると、男性は川手健の「半年の足跡」（『原爆に生きて』のあとがきに相当する文章）を含めても一二人しか書いていないのに対し、女性は一五人も書いている。第一部「生きる」に書いている六人のうち、女性は一人しかいないが、第二部「歩み」の執筆者一二人のなかでは女性が八人を占め、第三部の「叫び」も女性の割合が高く、九人のうち六人が女性である。このように女性の手記が多いことは、『原爆に生きて』の重要な特徴のひとつである。たとえば、同時期に刊行された広島市民生局社会教育課編『原爆体験記』（広島平和協会、一九五〇年）の場合は、執筆者一八人のなかで女性は五人しかおらず、それを再編した一九六五年版の『原爆体験記』（朝日新聞社）の場合も、執筆者二九人のうち女性は九人だけである。

このように、『原爆に生きて』所収の手記においては、女性の執筆者の割合が非常に高いのであるが、一方、この手記集を編纂した「原爆被害者の手記編纂委員会」のメンバーは、山代巴以外全員男性であった⁽⁵⁾。このことから、『原爆に生きて』の編纂過程において、戦前には女工たちとサークル運動をし、戦後には

農村で女性のエンパワメントのために取り組んだ山代巴の役割がどれほど大きかったかが窺えるだろう。

また、このように執筆者に女性が多いということからは、『原爆に生きて』における女性の〈表現〉の重要性という問題も浮かんでくる。前述の通り、『原爆に生きて』の構成は、「生きる」「歩み」「叫び」の三部にわかれており、第一部の「生きる」では、被爆者一人ひとりおよびその家族の「生命」の問題が強く意識されている。被爆者が受けた身体的な被害と医療の問題が中心になっており、病院通いや医療費、保険のことが細かく記されているものがほとんどである。この第一部に執筆している女性は、前述の吉川みち子一人である。みち子自身も被爆しているが、「母子抄」というタイトルが示すとおり、この手記の中心になっているのは、みち子の母親である。みち子自身も重傷を負っているが、それについてはほとんど書かれていない。フォーカスはつねに、原爆症に侵されながら七年間も命を承らえている母親に当てられ、みち子は、「何時までも何時までも母のそばにいて、母が元気になる日まで看病し続けたい」（二一〇頁）という言葉で手記を結んでいる。

第二部の「歩み」では、四〇代から八〇代まで、つまり人生の後半に入ってから原爆に遭った十二人の証言が収められている。もちろんここでも本人が受けた肉体的被害について書かれているが、執筆者の年齢の関係もあるだろうが、被爆前の人生を振り返り、そこに焦点を当てるものが多い。原爆に遭ってから現在までどのように生きてきて、これからのように生きていくのかということに重点が置かれているという点は、『原爆に生きて』全体につ

いて指摘できることであるが、ここでは、本人が「歩んで」きた道と、これから「歩んで」いく道が、とりわけ重視されている印象を受ける。この「歩み」には、八人の女性が書いており、山代巴のちに深い関わりを持つことになる多田マキ子の「夫はかえらない」も収められている。⁵⁶⁾

「歩み」とは対照的に、第三部の「叫び」には、若くして原爆に遭った二〇代半ばまでの若者たちの手記が収められている。「歩み」と違って「叫び」の執筆者は、被爆前の人生はわずかしか生きておらず、一番多感な時期に原爆に遭っているため、彼ら／彼女らの怒りの（叫び）は、全三部のなかでもっとも印象深いものとなっており、若いからこそ、彼ら／彼女らの平和への（叫び）も、もっとも迫力を持っている。「こんな人間を苦しめるものを、製造し、投下させるものを憎まずにいられ」（三七四頁）ないうち池田清子の声に、「父を殺した戦争を憎み」つつその死を「意義あるものとするために若い私の命を捧げて進もう」（三五一頁）としている上松時恵や、「長く生きられると思えぬ一生を、子供達の平和の為に尽くす決心」（三九三頁）でいる尾形静子、「どこまでも平和を叫びながら生きて行きたい」（二七〇頁）という牧かよ子たちの声が重なり、彼女たちの将来に対する積極的な態度が窺われる。被爆者で「かたわ者」と睨まれながらも「働いても働いても受け入れてくれぬ社会の不公平に口惜し涙が止まらない」（三五二頁）という上松時恵の手記には、「幼い時、夢見た花嫁の夢は無惨にも打ちこわされて」（三六九頁）結婚は「えん遠い」ものになったという牧かよ子の経験が重なる。さらに、「冷たい世間の目が、私の顔へ集ま」る時、「気をはりつめて、や

がて一人の女性として独立して見せる」が「せめて片方でなかつたら」と「心は急に暗くな」（三七三頁）するという、池田清子の女性の価値が見た目にあるとするような社会への訴えなど、世間の冷たい目や周囲から受ける差別が生々しく描かれている。「叫び」に手記を書いている男性は、川手健の「半年の足跡」を含めても三人しかおらず、「叫び」はこの手記集のなかで（表現）と（運動）と女性がかつとも密接に結びついている部分であるといえる。

3 手記「友の手紙」にみる原爆被害者と農村女性

第二部の「歩み」には、山野音代という女性の執筆した手記「友の手紙」が収められている。この「友の手紙」は、山野音代自身が執筆した前半と、えり子という被爆者女性の手紙と手記が引用される後半とによって構成される構造になっている。前半では、山野音代が、地方に住んでいるえり子を訪ね、「原爆被害者の会」への入会を勧めるとともに、手記を懇望する様子が、山野自身の視点から描かれている。一方、引用されているえり子の文章は、手紙三通と、被爆体験を語る短い手記である。つまり、えり子の家を訪ね手記を依頼する経緯を明らかにする山野音代の語りと、えり子の手紙と手記、つまりえり子自身による被爆体験の語りという、まったく性格の異なる文章が、一編の手記を構成しているのである。山野音代は、自分のことについて何も書いておらず、被爆しているかどうか不明らかにされていないが、その一方で、彼女がえり子を訪ねた際に出会った他の被爆女性のことも語られており、一人ひとりの証言を通して広島市内から遠く離れた農村

の被爆者に対する意識が明らかされている。

以上のように、山野音代は、「語り手」としてこの手記に登場し、えり子の経験だけでなく、複数の女性の被爆体験の語りを記録している。また、被爆者を訪ねて手記を頼む際にどのような壁に直面したかという、『原爆に生きて』の他の手記には記されていない事柄も記されている。手記集めの経緯や困難が記されている点は、川手健の「半年の足跡」と共通しているが、被爆者自身よりも彼らを取り巻く政治的・社会的状況に主として注目している川手健とは異なり、山野音代は、被爆者の「友」として登場し、被爆者個人、とりわけ女性の被爆者に焦点を合わせている。文体においても、まるで報告書のような「半年の足跡」と比べると、『友の手紙』は山野音代の語りとえり子の文章がうまく絡み合い、文学作品に近くなっている。

この手記においても一つ重要なことは、『原爆に生きて』に収められている他の手記と異なり、被爆者自身の変化のプロセスが記されていることである。最も苦しんでいる被爆者の中へ入り手記を書いてもらうことが容易でなかったことはすでに述べた通りであるが、そのことは序文において若干触れられているだけであり、当然のことながら被爆者自身によって書かれた手記においてはそのことは語られていない。一人ひとりがどのような経緯で「原爆被害者の会」と関わるようになったかということについても、何も書かれていない。そのなかで、「友の手紙」は、編者と被爆者とのやり取りの初期段階を唯一語っているテキストでもある。山野音代が訪ねた際に、「自己の愚痴、主人姑に対する不満、世の人々の心なさへの憤りでしかないような手記にな」ってしま

いそうで、「私の負わねばならぬ不幸せと寂しくあきらめて」（二六四頁）いるために、えり子は最初、手記発表の勧めを断っている。えり子は、結婚三日目に原爆に遭い、ひどいケロイドを負っているために、「不具の嫁だからろくな事はない」（二六三頁）と姑にいじめられながら、被爆者に対する支援がまったくない山間の部落で暮らしていた。

また彼女のように、原爆による肉体的および精神的な被害を負いながら、周囲の冷たさと差別に耐えなければならなかった女性は、村には他にもいたと、山野音代は語っている。「二号を持つのが当たり前よ」と、「まるで待っていたとでもいうように」（二六五頁、村の人たちに夫の浮気を肯定されるシゲという女性も、えり子と同じように「名前を出して真実のことは、とても書くことは出来な」かった。村の世界では、「一度おち目になった者は、こうした世間の落し目にあうまいと思うと、自分の悩みは口に出せない」（二六五頁）のである。つまり、農村共同体のなかで、弱いところを知られると、周囲の人は助けるどころか、その弱さにつけ入ろうとするために、抱えている不安などは口に出せないのだ。

しかし、山野音代は諦めずに、文通を続けた結果、再びえり子を訪ねると、協力を得ることができた。二人は「自分の名前で空々しい嘘を書くより、名前は嘘でも真実の苦しみを世の人々にうたえて、……理解して」（二六六頁）もらうようにしようと約束した。このことから、えり子には、山野音代の最初の訪問から二回目の訪問までの間に、ある変化が起こっていることに気づかされる。そして、「友の手紙」の最後に載せられているえり子の手

記は、『原爆に生きて』の他の手記と同じような構造を持つており、被爆してからの苦しい生活が淡々と語られ、特に姑から受けのいやがらせや、周囲の冷たさが強調されている。

このように、「友の手紙」では、「原爆被害者の会」を組織しようとしている女性と、沈黙を強いられたままの被爆女性との出会いから出発して、さまざまな葛藤や、被爆者を取り巻く厳しい環境が描かれているのであるが、同時に、そのなかで被爆した女性たち自身が変化していくさまも描かれている。えり子は、「原爆被害者の会」の支援のもと、自信を取り戻し、ついに手記を書く決心をする。えり子は、「日に日に自分というものの自信を失い、物言わぬうつむいた人間にな」（二七一頁）りかけていたが、山野音代と「原爆被害者の会」との出会いが、彼女を深く変化させたのである。「友の手紙」の結びの一節をなす、「私は今自分の無力を歎く。けれど、出来るだけ力になりたいと願っています。そしてこの真実の訴えに感じられる人々に、原爆被害者の力になっていただきたいと思う」（二七一頁）というえり子の言葉は、最初にはなかつた積極性を示している。

ここで、自分自身は被爆していないが、農村在住の女性被爆者を訪問し、手記を依頼する、「友の手紙」の執筆者「山野音代」とはいったい誰なのかについて、考えてみよう。結論から記してしまうと、これは山代巴の筆名であると考えられる。その理由は、「山野音代」の「山」と「代」の字が「山代」を思わせるからだではない。「山野音代」は、農村の被爆女性に注目し、訪ねて行っているが、「原爆被害者の手記編纂委員会」のなかで、農村のありさまに精通しており、親近感を持って農村女性と接するこ

とのできたメンバーは、山代巴を描いてほかにいないからである。「友の手紙」は、編者のなかで最年長であった山代巴が、手記成立の過程をも組み込むかたちでまとめた手記であると考えて間違いない。

そして、この特別な重要性を持った手記に注目すると、備後の農村において沈黙を強いられている女性たちを主な働きかけの対象として展開されていた山代巴の〈運動〉の経験が、被爆地広島やその周辺地域において沈黙を強いられている被爆者たちを主な働きかけの対象として展開された原爆被害者の会結成と手記編纂の〈運動〉に生かされたことがわかる。沈黙を強いられている農村女性に胸の内を〈表現〉する機会を与えることで彼女らをエンパワーしようとした山代巴の〈運動〉経験が、沈黙を強いられている被爆者に〈表現〉を促すことで被爆者を組織化しエンパワーしようとする〈運動〉に生かされたのである。

さらに、被爆地広島での〈運動〉のなから生まれた〈表現〉としての『原爆に生きて』は、山代巴によつて備後農村での〈運動〉のなかへと持ち帰られ、この地域におけるピキニ事件後の原水爆禁止署名運動の展開に生かされ、その高揚がまた、農村女性を主人公とする山代巴の〈表現〉としての『荷車の歌』を映画化し上映するという〈運動〉を下支えしていくことになる。被爆地広島と備後農村、被爆者と農村女性、そして〈表現〉と〈運動〉のこのような連環の中心にいたのは、表現者であると同時に活動家でもあつた女性作家山代巴であつた。

おわりに

以上見てきた通り、「友の手紙」は、『原爆に生きて』に収められている他の手記とは趣を異にしている。それは、手記の構成においてだけではなく、山野音代の語りの手法の効果により、原爆被害者の問題と農村女性の問題が重なり合い、一つになっていくからである。さらに、この手記では、被爆者と編者たちとのかわり方や、文章を書くことによって被害者一人ひとりが変わって行くプロセスが示されているという点でも、独自の意味を持つ。

また、この手記からは、山代巴が備後農村で尽力していた（表現）をエンパワーメントの方法とする運動が『原爆に生きて』編纂の運動に取り入れられていたことも明らかになる。備後農村で山代巴が実践していたのは、あえてもつとも声の届きにくい場所にいる人びとのところへ行き、彼ら／彼女らの「秘密」に耳を傾け、それを「誰のことかわからないように」し自分自身の経験も加えながらストーリーにして、人々と共有し、人々を変えていく、という方法であった。山代巴の農村での最終的な狙いは、「農民の気持ちにぴったり合う」⁽⁷⁾ような話を、農民に聞かせることによつて「鏡を与えて、自分の顔の墨を自分でおとせるようなきめ細かい批判者に」⁽⁸⁾なることであつた。また、山代巴は、農婦たちの言葉に耳を傾け、彼女たちの〈代弁者〉になることによつて、間接的ではあるが、女性たちに表現する力を与えようとした。原爆被害者の場合は、山代巴は〈代弁者〉というよりもむしろ〈代筆者〉としてかかわっているが、根本にある問題意識は共通して

いる。実際、山代巴は、「農村女性に本音を言わせないもの」と「原爆患者の口に、目に見えぬくつわをはめている……社会の病」が一致していることに気づき、「平和運動を精神的基盤にもつ大衆的な文化運動は……直接原爆の被害を受けた広島であらうと、被害を受けなかつた農村地帯であらうと……同じ仕事に取り組んでいる」⁽⁹⁾ことになる、という結論に至ることとなつた。

いうまでもなく、「原爆被害者の会」の結成も、『原爆に生きて』の編集刊行も、山代巴だけでなく、川手健をはじめとする多くの人びとの努力により実現された成果である。しかし、すでに述べた通り、沈黙を強いられている農村女性に胸の内を〈表現〉する機会を与えることで彼女らをエンパワーしようとした山代巴の〈運動〉経験が、沈黙を強いられている被爆者に〈表現〉を促すことで被爆者を組織化しエンパワーしようとする〈運動〉に生かされたことは疑いない。本稿では、とりわけ女性に寄り添いながらなされたこのような山代巴の独自の貢献を明らかにした。年少の盟友川手健らの営みについては、機会を改めて論じることとしたい。

注

- 1 同書は、『日本の原爆記録』第三巻（日本図書センター、一九九一年）所収。本稿では、同書から引用する際には、読者の便を考えて、『日本の原爆記録』の頁数を注記する。
- 2 山代巴文庫第二期第四巻『原爆に生きて』（径書房、一九九二年）には、この方面に関係する山代巴の文章がまとめて収録されている。
- 3 山代巴「女性と差別と文学と」、『部落』一七巻一二号、一九六五

年一〇月、五五頁。

二頁。

4 初期の被爆者団体とそのなかにおける原爆被害者の会の位置づけについては、宇吹暁『ヒロシマ戦後史』（岩波書店、二〇一四年）第三章第一節参照。

18 山代巴「歴史を追って現在に向かう」、『展望』一六〇号、一九七二年四月、六一頁。

5 調布市民文化団体協議会編『山代巴先生連絡講演会記録（第四日）・原爆の教えるもの』、一九六四年。

19 前掲「広島県文化文学運動」、八〇九頁。

6 山代巴「広島県文化文学運動」、『文学』一九五五年五月号、七頁。

7 山代巴『山代巴文庫 第二期（四）原爆に生きて』径書房、一九九一年、二二〇頁。

8 前掲山代巴文庫第二期第四卷『原爆に生きて』、二二〇頁。

9 山代巴「重家豊と文学運動」、広島市職員労働組合編刊『重家豊資料目録』、一九八四年、一七頁。

10 川手健「原爆文学についての雑感」、『広島文学』一九五三年八月号、二六〇二七頁。

11 前掲「広島県文化文学運動」、八頁。

12 小田切秀雄編『原子力と文学』、講談社、一九五五年、二〇二頁。

13 長岡弘芳『原爆文学史』、風媒社、一九七三年、三四頁。

14 前掲「原爆文学についての雑感」、二七頁。

15 『原爆に生きて』序文の末尾に「原爆手記編纂委員会」の構成員として名前が列挙されているのは、山代巴のほか、隅田義人・山中敏男・川手健・松野修輔である。

16 山代巴と多田マキ子との関係については、拙稿「被爆体験を（書く）——山代巴と『原爆に生きて』『この世界の片隅で』を中心に」

（『原爆文学研究』一三、二〇一四年）参照。

17 山代巴「村の文化活動」、『青年文化』一九四七年十一月号、二八